

三、井戸、伊藤、和邇、奥田氏等ハ、本症患者血清ト家鼠ヨリ得タル「スピロヘータ」ノ間ニ溶解現象ヲ證明シタリ。之ニ次ギテ、四君ハ、患者血清ト患者ヨリ得タル「スピロヘータ」ノ間ニ溶解現象ヲ證明シ得タリ。

尙ホ四君ハ大正六年、鼠咬症及ビ其ノ病源「スピロヘータ」ニ就テト題シ、病原體及ビ病理解剖、症候論、診斷並ニ類症鑑別、豫防及ビ療法等ニ關シテ詳細ナル綜合的報告ヲナセリ。

之ヲ要スルニ、二木、高木、谷口、大角四君ノ研究ハ、極メテ有益ニシテ、鼠咬症病原體發見ノ上ニ多大ナル貢獻ヲ爲セルモノナリ。

醫學博士石原喜久太郎君、醫學博士太田原豊一君及ビ故田村幸

太郎君ノ鼠咬症ノ實驗的研究ニ對シ、石原、太田原兩君ニ授賞審

査要旨

石原、太田原兩君ハ、緒方正規博士ガ明治四十三年、初メテ報告セル實驗的鼠咬症ノ方法ニ基キ、大正四年春以來、實驗ヲ重ネ、大正四年十一月二十日ノ東京醫學會ニ於テ、二木、高木、谷口、大角四君ノ鼠咬症ノ研究ノ報告ト同時ニ、鼠咬症ニ關スル實驗的研究ノ結果ヲ發表シ、且ツ鍍銀法ニヨリテ、副腎中ニ存在セル一種ノ「スピロヘータ」ヲ見出シ、之ヲ供覽セリ。

次デ大正五年一月、石原外二君ハ、罹患セル「モルモット」ノ心臟血液、又ハ、腸間膜腺「エムルジオン」ヲ、健康ナル「モルモット」ニ注射シ、「スピロヘータ」ヲ血中ニ證明シ得タリ。又「マウス」及

「ラツテ」ニ於テモ、接種後數日ニシテ「スピロヘータ」血中ニ現出シ、漸次増殖スルヲ見、該「スピロヘータ」ノ形態及ビ運動ニ就テ記載シタリ。

大正五年四月、石原外二君ハ實驗的鼠咬症ニ就テ、詳細ナル記載ヲ爲セリ。即チ咬傷ヲ受ケテ發病シタル「モルモット」ノ咬傷部ハ、二三日ニシテ腫脹シ、皮膚暗紫色トナリ、皮下淋巴腺腫脹スルニ至ルコト、咬傷後六七日乃至十日頃ニ至リテ發熱シ、更ニ下降スルコト、又日本猿ニ就テ以上ノ症狀ノ外、紅斑ノ發生ヲ見、其ノ熱型人類鼠咬症ノ定型ニ類シ、發熱二日又ハ三日ノ間ノ隔ヲ以テ、二十五日間ニ六回再歸スルコトヲ見タリ。尙ホ「サルヅアルサン」注射前ニハ、該「スピロヘータ」ガ血液標本ニ多數ニ存在セルモ、注射後全ク消失スルコトヲ實驗的ニ證明セリ。但シ再ビ現出スルコトアルヲ後ニ至リテ報告セリ。

大正五年十二月、石原外二君ハ田村憲二君ト共ニ、「デクマースス」、「アレキサンドリスス」、「ラツツス」ノ三種ノ鼠合計百八十六頭ニツキテ、該「スピロヘータ」ヲ檢シ、一一・二%ニ之ヲ證明シタリ。又此ノ報告ニ於テ、二木、高木、谷口、大角四君ノ見出セル人系「スピロヘータ」ト石原、外二君ノ鼠系「スピロヘータ」トハ、免疫學的ニ同一物ナルコトガ證明セラレタルコトヲ報告セリ。

大正六年、石原君ハ鼠咬症實驗篇ト題シ、共同實驗ヲ基礎トシテ實驗的鼠咬症ノ詳細ナル報告ヲ爲セリ。

之ヲ要スルニ石原、太田原、故田村三君ノ研究ハ極メテ有益ニシテ、鼠咬症病原體發見ノ上ニ多大ナル貢獻ヲナセルモノナリ。

附 記

右共同研究者中、田村幸太郎君ハ本研究ガ授賞ノ目的事項トシテ部會ニ提議セラル、ニ先テ、死亡セルヲ以テ、賞記及賞金ハ石原喜久太郎、太田原豊一兩君ニ授與ス。